

## 「西」への道——オランダにおけるインドネシア出身華人の軌跡

北村由美

### はじめに

冷戦が終わった後、グローバル化が進むなかで、国民国家の枠組みを超えた人の移動が加速するなか、人の国際移動の背景と影響に関してさまざまな文脈で検討が進められている。中でもアジア諸国は、冷戦期の一九七〇年代にすでに、単純労働・専門職を問わずあらゆるタイプの労働者の供給国であった（石井ほか二〇〇九・カースルズ、ミラー二〇一一）。さらに、紛争や災害に起因する難民など、さまざまなタイプの「国際移民」の出身国であることから注目されてきた（石井ほか二〇〇九・カースルズ、ミラー二〇一〇・西二〇一〇）。インドネシアも例外ではない。

さまざまな階層のインドネシア人の国際移動は、シンガポール、マレーシア、香港などアジア域内での移動も多いが、中東諸国、欧米諸国、オーストラリアなど世界各国に及んでいる。

グローバル化した社会において、人の移動による経済や政治の制度面の課題が論じられる一方で、オンが「フレキシブル・シティズンシップ」という概念で提示したように、社会の流動性を活用して移民や難民が戦略的に市民権を選択している状況も明らかになってきた（Ong 1996）。

また、国民国家の枠組みが相対化されるなかで、国民国家に回収されない、国家を超えたネーションの結びつきとしてトランスナショナルなアイデンティティの形成が重層的に起こっている状況が、アパドウライに代表される論者によって多角的に検討されている（アパドウライ二〇〇四）。

アバドウライ二〇一〇)。

本稿は、このようなグローバル化時代の人の移動が問題となつている現代から、今一度時代を遡り、インドネシアという国民国家の成立から冷戦下における体制転換の揺らぎのなかで、同国からオランダに移動した華人のライフ・ヒストリーを通して、現代アジア史を再検討することを目的としている。

オランダには現在、今日のインドネシアにあたる地域から移住してきた華人が、約一万八千人居住しているとされる (Ritschroeff et al. 2010: 155)。このなかには、二〇世紀初頭に留学生として当時の蘭領東インドからオランダに渡つた華人に始まり、インドネシアの成立前後に時代の転換点ごとにオランダへと渡航した華人が存在し、そのなかには定住にいたつた人も少なくない。

インドネシア出身の華人の中には、第二次世界大戦後、対華人政策の変更や、政治体制の転換、反華人暴動からの避難などを理由に、オランダや中国をはじめ、香港、シンガポール、オーストラリア、ドイツ、アメリカ、台湾など世界各地へ移動していく人たちが少なくなかつた。このうち、数において最大となるのは中国への移動であるが、それは一九六〇年代に集中している。これに対して、二〇世紀を通してインドネシア地域から華人が継続的に移動したのが、オランダである。

表1 インフォーマントがインドネシアを離れた時期

年代	男	女	合計
1940年代	2	3	5
1950年代	2	4	6
1960年代	2	3	5
1970年代	3	0	3
2000年代	0	1	1
合計	9	11	20

本稿は、第二次世界大戦後にインドネシアから旧植民地宗主国であるオランダへの移動を選択した華人のライフ・ヒストリーを事例とする。Iでインドネシアからオランダに渡つた華人について概観したのち、IIでは植民地から脱植民地への移行とスカルノ政権が確立した時代について、IIIではスカルノからスハルトに政権が移り、冷戦下においてスハルト体制が確立した後の移動について整理する。このなかで、秩序転換期における国家と個人との関係を、インドネシアからオランダに移住した華人の語りから描き出していく。

本稿で引用する個々人のライフ・ヒストリーは、二〇一一年一月から三月にかけての二カ月間と二〇一三年九月の一〇日間、オランダで行った合計二〇名のインタビュー記録に基づいている(表1)。インタビューは、訪問回数を複数回に分けてインフォーマントの家で行ったものが大半

である。インドネシアから出国した年代が一九四〇年代から一九六〇年代のインフオーマントのうち一二名に対しては英語で、残りのインフオーマントに対しては、インドネシア語でインタビューを行った。

## I オランダにおけるインドネシア地域 出身華人の概要

### 1 オランダ社会における移民受け入れの 歴史と現在の課題

オランダは、第二次世界大戦後から現在まで多様な移民を受け入れてきた国としてよく知られている。終戦直後には、独立を宣言したインドネシアから帰国してきたオランダ人引上げ者や、オランダ人などヨーロッパ人とインドネシア人との混血者である欧亜混血者に始まり、インドネシアやスリナムからの移住者を迎えた。戦後復興期にあたる一九五〇年代から六〇年代にはギリシャ、スペイン、ポルトガルから、七〇年代以降はモロッコ、トルコ、旧ユーゴスラビアから労働者を受け入れてきた（河野二〇〇七）。

その結果、二〇〇七年一〇月の時点で、アムステルダム、ロッテルダム、ハーグ、ユトレヒトの四大都市では、〇歳

から一五歳までの人口のほぼ半数が非欧州系移民の子弟で構成されるにいたった（河野二〇〇七：八二）。これら都市部では、とくにイスラム系の貧困層に属する移民二世の若者による犯罪などが社会問題として扱われ、移民に対する不満が急増した（河野二〇〇七：八二）。

このような移民受け入れ大国であるオランダ社会において、キリスト教徒が多く、オランダ語の素養があり、概して教育水準が高いインドネシア出身の華人は、他の移民グループと比較してオランダ人の目からみて異質な要素が少なく、移民政策の直接的な対象と考えられることはない。経済的にも豊かな人々が多いことから、通常は福祉政策の対象とならず、インドネシア華人自身にも、他の移民グループと自らを同一視されたくないという意識がある（Jansen 1991: 62）。また、たとえば一九五〇年代から七〇年代に同じく現在のインドネシア領マルク諸島から移動したアンボン人の人々が活発に政治活動を行ってきたのに対して、インドネシア華人の政治活動は概して目立たない（吉田二〇〇四：八八―九一；Steijler 2010）。では、オランダにおけるインドネシア出身の華人とはどのような人たちののだろうか。これまでの研究においては、どのように記述されてきたのだろうか。

## 2 インドネシア出身の華人移民の歴史と 先行研究

まず、オランダへのインドネシア出身の華人移民の歴史を概観しよう。ヨーロッパにおける中国系移民の研究で知られる李明欽は、インドネシアからオランダへの華人の国際移動を三度の波に大別している (Li 1998)。第一の波は、蘭領東インド期における二〇世紀初頭の高等教育機関への進学を目的とした留学生である。一九一一年には、アムステルダム、ライデン、ロッテルダム、ワニンゲンのインドネシア華人学生二〇人のメンバーによって、中華会 (Chung Hwa Hui) という学生団体が設立された。インドネシア華人留学生の増加に伴って、同会の会員数は一九三〇年に一五〇人まで伸びた (Li 1998: 168-169)。

蘭領東インドで華人の子弟を対象としたオランダ語学校 (Hollandsche Chinese School: HCS) が成立したのは、一九〇八年のことであった。それ以前も華人の中には、原住民を主な対象としたミッション系の学校に通い、学年が進むにつれオランダ語で学ぶ者や、ごく少数ではあったがヨーロッパ人向けの学校に通うことを許された者もいた。しかし原則として、原住民向けの学校も、ヨーロッパ人向けの学校も、華人子弟の入学を例外として限定的に認める

のみであった (Govars 2005: 39-45, 69-71)。

こうしたなかで、二〇世紀初頭になってようやく華人向けのオランダ語公教育が開始された背景には、シンガポールの華人らの影響を受けて、一九〇〇年に成立した中華会館 (Tjong Hoa Hwe Koon) の存在があった。中華会館は、華人による華人子弟のための近代教育を行う学校であり、儒教に基づいた道徳教育と、中国語 (北京語) と英語の二言語による教育を謳った。中華会館をモデルとした華人による学校は、蘭領東インド各地に急速に広まった。こうしたなかで植民地政庁は、華人が親中派になることを危惧し、ようやく重い腰をあげて、華人に対するオランダ語教育に着手した (Govars 2005: 76-83)。

オランダ植民地政庁はさらに、一九二七年に華人を対象としたマレー語学校 (Maleisch-Chinese School: MCS) を開校した。これは富裕層に属さない華人を対象としたが、経済的に余裕のある華人は植民地における社会上昇に有利な HCS に子弟を入学させた (Govars 2005: 143-170)。その結果、一九三〇年代には、全人口の約二パーセントにすぎなかった華人の約一〇パーセントがオランダ語能力を身に着け、原住民オランダ語話者の数を凌駕するまでとなった (Lohanda 2002: 76)。

一九四五年から一九四九年にかけてインドネシアは、独立をかけたオランダと戦った。インドネシアが正式に独立

した後も、オランダ企業の駐在が続くなど、オランダ植民地期の社会経済が残り続けたため、オランダ語能力は華人エリートにとって文化資本であり続けた。そのため、インドネシアにおいてオランダ語による初等・中等教育を受けた華人の留学は、第二次世界大戦後も継続し、一九五〇年代に第二の波を迎えた (L1:1998:168-169)。

第三の波は、インドネシアにおいて九・三〇事件が発生し、スハルト政権が成立したことを契機として断続的に続いた移動である (L1:1998:168-169)。九・三〇事件とは、政権奪取をもくろんだ共産党がクーデターを計画したが、それをスハルトが事前に察知して鎮圧したとされる、一九六五年九月三〇日に起こった事件である。この事件を機に容共派のスカルノにかわって実権を握ったスハルトは共産党勢力の壊滅を目指して徹底的な粛正を行い、共産党との関係が疑われた者もその対象となった。この時期に犠牲となった人は五〇万人にもおよぶといわれ、被害者の中には華人も多く含まれた。スハルトはさらに、言語や慣習、名前など中国的な文化を抑圧する策を開始した。

インドネシアからオランダに移住した華人を扱う先行研究の主な調査対象は、第二の波に属する元留学生のうち最終的にオランダに定住した人々である。李は自身が調査を行った一九八〇年代後半において、オランダにおける中国系移民は約六万人で、そのうちインドネシアからやってき

た人たちは七千人程度であろうと推計している。李をはじめとする先行研究において、この第二の波でインドネシアから移住してきた華人は、「プラナカン華人 (Peranakan Chinese)」と称されることが多い。

プラナカンとは、インドネシアにおいては、インドネシア生まれの華人を意味する。二〇世紀初頭、中国からの新移民が増加し、中国からの移民一世を、新客やトトック (Totok) と称した。これに対し、主にジャワ島を中心に何世代にもわたって暮らしてきた家系のもとに現地に生まれた華人がいた。彼らは、現地人の女性や、華人と現地人の混血である女性を母親に持つことも多く、独自の文化を形成してきた。インドネシアでは一般にプラナカンという言葉は、血統においても文化においても混血的な華人像を想起させる。しかしオランダの「プラナカン華人」は、必ずしもこうした華人像と一致するわけではない。この点については後ほど詳しく述べたい。

李をはじめ、先行研究においては、オランダ語教育を受けてきた「プラナカン華人」は、男女を問わず高学歴であり、医師、歯科医、薬剤師、学者など専門性の高い分野や、銀行員などホワイトカラーの職業についていることが強調されている (L1:1998)。

李は、このような「プラナカン華人」の民族アイデンティティを探り、彼らが、七〇年代以降増加した中国から

の移民とも、オランダ人とも、華人以外のインドネシア人とも自らを差異化し「三つの壁に囲まれて生きている (Living Among the Three Walls)」と表現している。

筆者がインタビューした「プラナカン華人」にも、富裕層出身の人々が多数含まれていた。彼らは、オランダ留学以前より家族同士が連絡を取り合い、オランダ到着後も同じような階層の「プラナカン華人」との交流を深め、そのグループの中で結婚する場合が多かった。富裕層出身の「プラナカン華人」の場合、インドネシアからオランダへと空間的な移動を行っていても、社会階層間の移動がなく、結果的にインドネシアと同じような社会生活を再現していた。民族意識に加え、この階層意識が富裕層の「プラナカン華人」を三つの壁の中に押し込めている要素の一つであるように見えた。一九八〇年代以降、「プラナカン華人」のための団体が各地に設立された。これらの団体は、退職年齢を迎えた人々によって設立された。活動の内容は、会員やその家族のためのセミナーや文化行事などである。

インドネシア出身華人のカルチュラル・スタディーズ研究者、アン (Ang) は、九・三〇事件後、一二歳の時に、両親とともにオランダに移住した。アンは、自らの経験を分析した著作 (Ang 2001) において、「プラナカン華人」はオランダの生活に順応した後、自らを再民族化 (re-

ethnicized) しようと指摘している (Ang 2001: 31)。さらに、再民族化の過程において、中国語を話さず、中国生まれの中国人とは違うという意識がありながらも、文化的にはインドネシアではなく中国を志向しているとして、ディアスポラ華人が華人としての意識を持つ華人性 (Chineseness) の根強い影響力を指摘している (Ang 2001: 31)。インドネシアにおけるプラナカンと呼称は同じだが、オランダにおける自らの位置づけを見出すために独自の民族グループとして「プラナカン華人」が創出される過程であったといえる。

「プラナカン華人」という民族カテゴリーを創出することによって、再民族化した背景には、中国やインドネシアとの距離感に加え、西洋世界における黄色人種であるという外見の差異という変えようのない事実がある。ホスト社会において、どれほど文化的に同化しようと努めても、外見の差異によって自らの異質性を意識せざるをえない (Ang 2001)。インドネシアにおいても、華人は往々にして外見によって区別されることが多いが、オランダにおいても外見によって周囲の人々が想像する、中国という本来的には自らの出自と関係のない「ホームランド」から逃られないことが、「プラナカン華人」という新たな民族アイデンティティを創り出す一因となったといえるだろう。インドネシアを逃れてきた、もしくはインドネシアへの



帰国が難しくなったためにオランダへの定住を選んだ「プラナカン華人」にとつて、インドネシアへの帰属意識をストレートに表現することには心理的な壁があったことが推測できる。一方で、インドネシアにおいて中間層以上の豊かな生活をしていて知識人の多い「プラナカン華人」には、文化的な表象としての中国ではなく、一九七〇年代後半から八〇年代前半にかけて急増したレストラン経営者に代表される実体としての中国人移民と同一視されることへの抵抗があり、「プラナカン華人」という呼び名を選び取ったと考えられる<sup>\*)</sup>。

一方、ヤンセン (Jansen 1991) は、オランダ在住のインドネシア華人へのインタビュー調査から、移民による国際移動が女性のアイデンティティにどのような影響を与えたのかを検討している。ヤンセンの調査から得られる知見としては、女性に対する社会的な期待が大きく異なる社会への移動を分析する際に、彼女ら自身のライフコースのどの段階において移動をしたかを考慮することの重要性がある。

女性の場合は、結婚によって妻になり、出産によって母になるといふ家庭内の役割の変化への適応を、自らが育ってきた文化において期待されてきた妻や母の姿とは違う社会において行っていくことの負担がある。移民は、異なる社会間の移動に加え、しばしば階層間の移動を伴う場合が

ある。たとえば、出身国で医師であった人が、移動先で清掃やレストランの皿洗いアルバイトから始めるといふケースを想像してみると分かりやすいだろう。ヤンセンのインフォーマントの場合は、そのような極端な階層間の移動は経験していないが、オランダへの移動によって、期待される主婦や母としての役割の違いが変わったことへの戸惑いを述べている (Jansen 1991)。

筆者のインフォーマントの場合もそうであるが、インドネシア出身の華人女性の多くはインドネシアでは、家事や育児を手伝ってくれる家事労働者がいる環境で育ってきた女性が、移動先であるオランダでは、家事労働のすべてを主婦が一人で担っていくことが当たり前とされていた上に、子供たちの学校の時間や、店の閉店時間などがきっちり定められており、日常生活における孤独感とストレスが高かった。興味深いのは、このような新たな環境の中で、インドネシア華人女性が、自らの理解に基づいた伝統的な中国人女性の役割を自らに課すことによつて、オランダのマイノリティグループの中に自らを位置づけていった局面があるという点である (Jansen 1991: 60-63)。

ヤンセンの調査からは、女性の場合は、階層間の移動よりも移動後に個々人が迎えるライフコースの段階において、社会から期待される役割の違いの方が個人の自己認識に大きく影響を与えていることがうかがえる。ヤンセンは

また、九〇年代初頭におけるオランダの移民政策が民族別に構成されており、血統上は中国人である「プラナカン華人」女性が、正しい中国文化や中国人をめぐる華人性の問題に突き当たった点を指摘し、母として正しい文化を伝える立場という視点から再民族化の問題を捉えている (Jansen 1991: 66-63)。

以上でみてきたように、オランダへは、インドネシアにおける政治状況に呼応して、さまざまな背景を持った華人が移動しているが、先行研究において描かれてきたのは、ホワイトカラーとしてオランダ社会に順応する「プラナカン華人」が中心であった。本稿では、これらの「プラナカン華人」像を参照しながらも、「プラナカン華人」のみに限定せず、オランダにおけるインドネシア華人の記述を行う。李の区分に従うと、主に第二と第三の波によってオランダに移動したインドネシア華人の移動の背景と定住後の生活を中心に論述する。ただし、第三の波には、九・三〇事件の直接的・間接的な被害者でインドネシアからオランダに直接逃れてきた人と、スハルト政権の成立によってインドネシアへの帰国を諦めざるをえず、難民化した人々が含まれる。

### 3 中国という選択肢

ところで、これまでの先行研究においては、「プラナカン華人」と文化や表象における中国が問題になっていたについても、簡単に述べておきたい。現在では、「プラナカン華人」団体に参加している人々にとっても、中国の存在はさまざまな形で人生に影響を及ぼしている。一九四八年にジャカルタの中華学校を卒業したAさんの場合、そもそも留学先は香港だった。しかし、一九四九年に中華人民共和国が成立したことによって、政治的混乱に巻き込まれる可能性を心配した父親の判断によって、香港からインドネシアに帰国した後、オランダに再留学をした。

また、Bさんの話によると、一九五〇年代のインドネシア華人学生団体は、社交活動が主で、政治活動は行っていなかったが、しばしば友人との会話で、中国がインドネシアのどちらに「帰国」するべきかという話題が出たという。実際にBさんの友人の幾人かは、中国に「帰国」し、中国の高等教育機関で教授職を得た人もいた。

なおその当時は、インドネシア華人学生団体は、中華会に加え、アムステルダムの中山会、デルフトの討論会など複数存在した。インドネシアが独立した後、一九五二年の



中華会では、後にインドネシアに帰国し、華人のインドネシア社会への同化を支持することになる Lauw Chuan Tho (または Junus Jajaja) が中華会を解散し、インドネシア留学生協会 (Perhimpunan Pelajar Indonesia: P P I) へ合流することを説くが (Suryadinata 1997: 144-147) 同会は一九六三年まで継続する。Bさんの話では、他のインドネシア華人学生団体やオランダ人学生との交流はあったが、華人以外のインドネシア人学生との交流は限定的であったという。

一〇歳の時に、兄・姉とともにオランダに留学し、今日にいたるCさんにとっても、中国は決して遠い存在ではなかった。Cさんはマカッサル出身の華人の父と中国の蘇州出身の母の間に生まれたことから、大学で日本文学と中国文学を専攻し、ライデン大学で長きにわたって教鞭をとった。

また、Cさんの姉夫妻は、実際中国に渡ったこともあった。二人はアムステルダム大学の在学中に知り合った。ジャワ出身のプラナカンの夫が、大学で学んだ医学を通じて中国の国家建設へ貢献したいという希望を持っていたため、二人は一九五七年にインドネシアに帰国した後、双方の両親の反対を押し切って、中国へ渡った。しかし最終的には、中国での生活をあきらめ、再びヨーロッパに渡航し、ドイツに永住することになった。Bさんの友人やCさ

んの姉夫妻のように、インドネシアにおいても裕福なプラナカン家庭の出身で、さらにオランダで高等教育を受けた人々にとっても、中国の存在が人生の選択に影響を及ぼした点は、重要であろう。

## II オランダ植民地から

### 国民国家インドネシアへ

#### 1 独立期の混乱

一九四五年八月一七日、日本の敗戦を受け、インドネシア共和国初代大統領スカルノと副大統領のハッタは、首都ジャカルタ市内で独立宣言を発表した。ところが、旧宗主国のオランダは、この独立宣言を承認せず、インドネシアの再植民地化を目指した。一九四五年から一九四九年にかけてインドネシアは、独立をかけてオランダと戦った。

戦乱期による混乱のなかで、オランダへの協力者とみなされるが多かった華人を排除する動きも生じた。こうしたなか、インドネシアを離れる決意を固くして、オランダに移住する華人が現れた。

## 2 オランダに通じる道

第二次世界大戦終了後、日本軍の強制収容所に収容されていたオランダ人や、欧亜混血者であるユーラシアンらは、いったん元の住居に戻る。戻ってきた彼らを近隣のインドネシア人らは、当初は温かく迎えていたが、彼らが植民地時代の（主従関係を再現するような）態度を取り戻すにしたがって、彼らとインドネシア人との間に軋轢が生まれていった（Anderson 1972: 125-126）。さらに、オランダ軍の再上陸が確定になった後には、彼らはしばしば各地でインドネシア人の若者が構成する組織の暴力の対象となった（Anderson 1972: 147-166）。

オランダ人とユーラシアンに加え、オランダ企業などの職員やその家族も、場合によってはこれらの暴力を避けるために、各地のオランダ人向けの保護キャンプ内で数年過ごすことになった。インフオーマントの中には、これらのキャンプで幼少期の数年間を過ごした人が何人か含まれている。

Dさんもその一人である。スマトラ島メダン出身の彼女は、第二次世界大戦後、妹とともにキャンプ内で再開されたオランダ人向けの学校に登校していた。Dさんの父親は、第二次世界大戦前はオランダの貿易会社でエンジニア

をしていたが、戦争が始まった後は華人企業の会計を担当していたという。日本軍が撤退した後のメダンでは、華人やオランダ人が略奪の対象となったため、同じスマトラ島内にあり比較的安全だったバダンに親族を頼って逃げる華人も多かったという。Dさん一家は、Dさんとその妹がオランダ人学校に通っていたこともあり、一九四六年から一九四七年にかけて保護キャンプに入るようになった。Dさんは、中等教育（Hogere Burger School: HBS）を修了後、一九四六年にキャンプから直接、オランダ人向けの帰国船でオランダに渡航し、当地で大学教育を受けて就職した。

オランダ政府は、一九四五年から一九六四年までインドネシアからオランダへの帰国船を運航していた。一九四五年から一九五四年の間に三〇万人以上がオランダへと移動した（表2）。オランダからインドネシアへと移動した人と相殺すると、約一三万九千人がオランダに移住したことになる（Kraak 1958: 30）。また、この他に、旧王立蘭領東インド陸軍のアンボン人隊員とその家族一万三千人が、一九五一年にオランダ政府の手配によりオランダに移住した。これらの数字を合わせると、一〇年間に実に一五万人以上の人が、オランダに移住したことになる（Kraak 1958: 30-31）。インドネシアからオランダへの移動の波は四回あり、その最後の波は一九五七年末に始まった（Kraak 1958: 35；

表2 オランダ人口登記によるインドネシアからの入国者数とインドネシアへの出国者数

	インドネシアからの入国者数(A)	インドネシアへの出国者数(B)	差し引き入国者数(A-B)
1945	n.d.	n.d.	-0.4
1946	69.3	5.4	63.9
1947	22.0	23.4	-1.4
1948	17.6	29.0	-11.4
1949	16.5	23.1	-6.6
1950	55.9	9.1	46.7
1951	30.3	9.8	21.5
1952	16.2	8.9	7.3
1953	14.2	6.3	7.8
1954	17.2	5.6	11.8
1955	24.0	4.5	19.5
1956	18.3	5.1	13.2
1957	± 16.2	4.4	± 11.8

(出所) Kraak (1958: 29)

(注) 単位：千人。数字は原文のまま。Kraak (1958) はオランダ中央統計局のデータを基に作成。

Beekhuis en Oosten 2001)。同年一月にインドネシアとオランダとの間で西イリアンの帰属問題が決裂したことを契機に、インドネシア政府が軍を中心にオランダ企業への接収を行い、それによって生じた失業者が中心だった (Kraak 1958: 35; 宮本二〇〇三)。第二次世界大戦後、断続的に継続していたオランダ人の帰国や、ユーラシアンやオランダに関係したインドネシア人の移動は、この波で一段落した。同時代にインドネシア地域からオランダへの帰還を研究したクラークは、オランダにおける受け入れ体制を成功例として評価している (Kraak 1958)。一九四五年から一九六四年にオランダに移った者のうち、八万三〇〇〇人がオランダ移民局の手配のもとで帰国した。

そうした例にあたるのが、Eさんである。一九三九年スラバヤ生まれのEさんは、養父が一九六一年に設立されたインドネシア国营電力公社 (Badan Pimpinan Umum Perusahaan Listrik Negara: B P U P L N) の前身の一つであるオランダの電力会社に勤めていたことから、一九四五年から一九四七年までの二年間を保護キャンプで過ごした。当時のスラバヤは、毎日親オランダ派の人が殺害され、キャンプの周囲の木にひっかけられているような状況だったという。

Eさんは一九五六年、一七歳の時に、このままインドネシアにいても未来がないと感じ、スラバヤのオランダ移民局支部に出向き、家族全員分のオランダ行きを自ら申請したという。オランダ行きの情報は学校間の交流 (ダンスやバレーボールなど) の場を通じてよく一緒に遊んでいた他校の友人から聞き、その友人も同じ船で出発した。スラバヤの学校関係の友人でオランダに来た人たちは、現在でも時々一緒に集まっているという。渡航の申請はそれほど難しくなく、渡航費はすべてオランダ政府が負担した。

蘭領東インドでは、一九一〇年に「非オランダ人のオランダ臣民権法」が成立し、植民地の住民は臣民として国民とは別の位置づけにあったが、一九四九年にインドネシアへ主権を委譲してから二年間は、ユーラシアンや国籍を確認できない者に国籍選択権を認めた (吉田二〇〇四・八七

一八八)。Eさん一家の場合も、おそらくこの時期にオランダ国籍を取得していたと思われる。

Eさんのオランダへの渡航時期は、オランダ人の帰国の最後の波である一九五七年直前であった。一九五〇年代のインドネシアでは、ジャワ島以外の地域において反乱が恒常的に続いていた。一九五五年に実施された最初の総選挙は、民族間や地域間の対立を一層深めることとなった。他方で、プランテーションに支えられてきた植民地時代からの社会経済構造の変革を目的とし、インドネシア人小企業の成長を狙ったベンテン政策が失敗に終わり、経済ナショリズムが一層進んだ。

一九五六年にオランダへの帰国船に乗ったEさんの移動前後の記憶は、とても鮮明である。Eさんの場合は、典型的な「プラナカン華人」と違い、渡航後に工場勤務をしながら専門学校を卒業したという経歴を持つ。少し長文になるが、当時のオランダの状況が伝わってくるため、以下にEさんの話をまとめて紹介する。

Eさんはスラバヤの移民局事務所にて家族全員分の渡航申請をしたが、両親はひとまずインドネシアに残ることになり、一カ月後に姉・兄・彼・弟といずれも未成年の子どもたちだけで乗船した。当時オランダには、夫が王立蘭領東インド陸軍兵だった母方の叔母夫妻が移住していた。一九五六年一月にシバヤック (Sibajak) 号に乗船し、一

二月九日にオランダに到着した<sup>\*4</sup>。シバヤック号は、映画館や店がある豪華客船で、約五〇〇人の乗船客がいた。スラバヤからジャカルタに行き、南アフリカ経由でオランダに向かった。船の上では、食事、服などすべて支給され非常に快適だった。

オランダ到着後、両親がいない未成年はデン・ハーグの施設に集められた。デン・ハーグには政府の受け入れ担当者がおり、すぐに良質な服を買いにつれていってくれ、当面のポケット・マネーも支給された。施設には二カ月いた。政府が受け入れ家族を募集しており、受け入れ家族には、地方政府から補助金が出た。オランダ政府は、移住者の定住先を宗教別に振り分けていたようで、カトリック信者だったEさん兄弟らは南部へと送られ、オランダ人の家族に受け入れられた。兄はアントホーベンへ送られ、残りの三人はマーストリヒトの受け入れ家族に引き取られた。姉は、インドネシアでも電力会社で事務職に就いていたため、事務職に就き、弟は学校へ行った。受け入れ家族はEさんも就業することを希望したため、給与が支給される職業学校に行き、施盤工を専攻した。カリキュラム修了後フェンローの工業学校中級課程に編入したが、その後二年間徴兵された。

一九六三年に両親がオランダに来て、フェンローで一緒に暮らし始めた。当時母は四〇歳、養父は五二歳だった。

六四年よりマーストリヒトの工場に勤務し、工業高等学校に通ったが、工場にプラスチック部門が設立し、そちらに移ることになったため学校はやめた。一年で同部門のマネージャーに昇格した。当時のオランダには有色人種はインドネシア人ぐらいしかおらず、マネージャーまでなろうとするとオランダ人の三倍働く必要があったとBさんは回顧する。一九六六年にオランダ人の妻と結婚した。三人の子供がいる。妻とは二〇〇一年に死別した。

Eさんのオランダ到着当時の記憶は、当時のオランダの社会福祉省の英文報告書に記されている帰国者に対する政府側の対応状況を裏付ける経験談である (Ministry of Social Work 1958)。社会福祉省では、Eさんのような若年層への対策に加え、企業退職後の老年層に対する対策も行っていた (Ministry of Social Work 1958: 2-3)。

DさんやEさんは、オランダへの移住を固く決意して渡航した。これに対して、同時期にオランダに私費で留学していた華人の中には、インドネシアへの帰国を視野にいていた人も少なくなかった。しかしそのほとんどが、スハルト政権の成立後、インドネシアに残っている家族に帰国を延期するよう提案され、そのままオランダで就職し、オランダ国籍に切り替えて定住することとなった。

### III オランダへの道筋の断絶と インドネシアの体制転換

#### 1 一九・三〇事件と移動

オランダ政府によって用意されていたオランダへの道筋は、一九六四年で途絶えた。この時期はインドネシアの歴史においては、スカルノ体制からスハルト体制へと政治体制が大きく転換する時期と重なっていた。一九六五年の九・三〇事件以降スハルト政権下において、インドネシアを後にする華人が多数現れた。その中にはオランダに向かった者もいた。ただしこの時期にオランダに移った人は、一九六四年以前にオランダに移った人とは異なり、オランダに行きつく経路を自ら開拓する必要があった。そのような例として、Fさん一家の例がある。

Fさんは前述のDさんの妹である。Fさんは一九二八年にスマトラ島メダンで生まれた。Fさんは中等教育修了後、バンドンの大学に進学し薬学を学んだ。しかし、一九五七年に教授言語がオランダ語からインドネシア語に切り替わったため大学を退学し、同大学の薬学部を一九五六年に卒業した先輩であった夫とともにメダンに帰郷し、夫は

薬剤師をしていた。一九六六年のある日、Fさんの夫は突然警察に連れ去られた。Fさんの夫は当時、大学の非常勤講師として勤務しており、その勤務先として新たな大学がもう一校加わることになっていた。その大学の関係者であった華人の友人が、共産党員であるとの嫌疑をかけられた。Fさんの夫は政治活動に全く関心がなかったが、芋づる式に逮捕されてしまった。幸いFさんに軍人の知人がおり、その知人に頼み込んだことが功を奏して、夫は一晩で帰宅できた。しかし、当時五歳と一歳であった幼い子どもたちの将来も考えて、Fさん夫妻は移住を決断した。Fさんにとって九・三〇事件は、身の安全を求めてキャンプで生活するにいたった独立戦争期の混乱の記憶に加えて、インドネシアにおいて華人が暴力の対象となりうることを一層強く意識させられた経験となった。

大学時代の知人を辿り情報収集を始めたFさん夫妻は、カリブ海にあるオランダ植民地のキュラソー<sup>＊5</sup>で薬剤師の求職があることを知り、一九六八年に正規のルートで移住を申請し、インドネシアのパスポートでキュラソーに渡った。キュラソーに移住した後に、メダンで所有していた不動産などの資産を、華人の知人を通じて売却した。その金は、キュラソーへの中継地であったシンガポールの華人を通じて、キュラソーの知人に送るよう依頼した。その後、Fさんの父とFさんの夫の姉が、Fさん一家を追うように

してキュラソーに移住してきた。キュラソーに移住してから五年後に、一家はオランダ国籍を取得した。父はキュラソーで亡くなった。夫の姉はオランダまで共に移動し、Fさん家族と生涯を共にした。

キュラソーには高等教育機関がなかったため、一家は当初から子どもは大学進学にあわせてオランダに再移住する予定であった。そのため、Fさんの夫は一九七六年に単身でオランダに一三ヶ月留学し、オランダで薬剤師の資格を取得し、将来の移住に備えた。子どもたちがオランダの大学に進学した後、一九八六年にロッテルダムに薬局を購入し、夫婦と姉の三人もオランダに移住した。当時夫は五八歳になっていた。

Fさんの家族の移住は、九・三〇事件をきっかけに、長期的な計画に基づき段階的に行われた。インドネシアからキュラソー、さらにオランダへと、オランダの影響が及んでいた地域間で、移動を繰り返したFさん家族の事例は、オランダ語を文化資本とする「プラナカン華人」の典型的な事例と共通する点もある。他方で、家族の進学やキャリアのタイミンングと移動を組み合わせていくプロセスからは、インドネシアのみならずオランダとの心理的距離感が十分にあることがうかがえる。著者がFさんに三国に対する思いを聞いたところ、Fさんの場合、少女期をインドネシア、熟年期をキュラソー、老年期をオランダでおくと



いう経緯を辿ったため、充実した熟年期を過ごしたキュラソー時代が思い出深いとのことだった。この答えからも、Fさんのオランダとの心理的距離感がうかがえる。

## 2 体制変換による難民化と移動

九・三〇事件後成立したスハルト政権は、共産主義勢力の掃蕩を強硬に進めていった。こうしたなかで、スハルト政権が始まる以前に国交があった社会主義諸国へ派遣されたり、留学したりしていた人々の帰国が難しくなった。具体的には、スカルノ期に社会主義諸国へ留学していたり、

外交官など公務によつて海外に派遣されていたりした左派知識人である。彼らは、「プラナカン華人」や、華人排斥を逃れてインドネシアを離れた人々と年齢的には同年代であったとしても、まったく違う経緯でオランダに辿り着いた。彼らは、外国滞在中に政権が代わり、親共から反共へと政策が変わったため、亡命を余儀なくされた人たちであった。彼らについては、ヒルによつて、半世紀を経てようやく実態が明らかになりつつある (Hill 2010)。

独立戦争後、インドネシア共産党が勢力を拡大するのに伴い、挙国一致体制に同党も組み込まれた。こうしたなかでスカルノ期にインドネシアは、中国やソ連をはじめ社会主義国との関係を深めていった。とくに同時期に成立した

中華人民共和国は、近代国家のモデルとして理想化され、相互に交流を深めた (Jin 2011)。このような政治的気運のなか、スカルノ政権下では、アルバニア、ハンガリー、ルーマニア、チェコスロヴァキア、ブルガリア、ヴェトナム、北朝鮮、エジプトなどの社会主義国に、インドネシアおよび留学先の政府奨学金を受けて、数多くのインドネシア人が留学していた (Hill 2010)。数で見ると中国が最多だが、ソ連への留学生も多く、一九六五年時点でソ連国内のインドネシア人は二千人に上り、ソ連内の外国籍住民のうちで最多であった (Hill 2010: 28)。

九・三〇事件直後インドネシア政府は、スカルノが社会主義国に派遣した外交官へ帰国命令を出す、マリ大使であったタシン (Suradi Tasin) をはじめ帰国を拒否した人たちがいた (Hill 2010: 31)。留学生に対しては、一九六六年五月七日に、教育省が在外インドネシア人留学生のすべてにインドネシアへの忠誠心を審査する思想テストを義務付け、同年七月一五日に外務省によつて審査方法が定められた (Hill 2010: 31-32)。思想テストを拒否した場合は、パスポートを取り上げられ、インドネシアへの帰国のみが許される旅行許可書が与えられた (Hill 2010: 32)。留学生の間では、反共を掲げるスハルト政権下のインドネシアに帰国することは自らや家族の安全に関わると信じられていたため、留学先に滞在し続け、無国籍になった人々が少なく

なく (Hill 2010: 32)。一方で、当時北京にいたインドネシア共産党幹部のアジトロプ (Jusuf Adjitorop) らによって「代表団」と呼ばれるインドネシア共産党海外組織が設立され、共産党員をはじめとするインドネシアからの亡命者に北京に集合するように声をかけた (Hill 2010: 31-32)。しかし、北京へと参集したインドネシア人らは、文化大革命によって地方へ下放されることとなった (Hill 2010: 34)。

九・三〇事件によるインドネシア人亡命者の多くは、中国に参集した人も、勉学を終えることを優先して留学先の社会主義国に残った人も、数十年を経た後に西側諸国に脱出した人が多い。ヒルは、当時のインドネシア亡命者を約五百人と推計し、現在ではその数は半数に減り、その大多数がオランダに居住しているとする (Hill 2010: 38)。オランダのバリ人コミュニティにおいてはこれらの元留学生たちは「スカルノの学生」と呼ばれ、オランダ移住後も独自のネットワークを構築している (Dragolovic 2010)。

著者のインフォーマントにも、ジャワ出身ではあるが「スカルノの学生」といえる華人が含まれていた。「スカルノの学生」だった華人たちは、留学先で九・三〇事件を迎えた後、インドネシアにいる家族との連絡が絶たれるなかで、無国籍の状態それぞれの留学先で一〇年以上生活した。彼らの留学先での境遇は、さまざまであった。留学先の北京から地方へ下放され、移動元であるインドネシアと

移動先である中国の両国の政治変動に翻弄された人もいた。その一方で、安定したキャリア形成を遂げた人もいた。たとえば、筆者が話を聞いたアルバニアへの元留学生の場合は、医学部卒業後に医師となり専門性を活かせる職に就いたということだった。安定したキャリアを形成した人も含め、「スカルノの学生」だった華人には、一九七〇年代に入った頃から西洋諸国を目指し、最終的にオランダに辿り着いた人々がいる。筆者のインフォーマントらの話では、当時は入国審査がゆるやかでビザなしで三ヶ月間の滞在が可能であったドイツに入国し、そこでオランダ入国の準備を整えたという。

筆者のインフォーマント達が、これらの留学先からオランダに移住した背景には、インドネシアに残った家族の問題があった。彼らは、インドネシアに残った年輩いた両親と再会するために、あるいは両親を引き取って生活する場所を求めて、オランダへの移住を選択した。旧宗主国であるオランダには、親族や知人などがすでに定住しており、移住当初のめどがつきやすかったためである。彼らは、インドネシアを出国する前にインドネシア学生運動団 (Consentrasi Gerakan Mahasiswa Indonesia: CGMI) に所属していたり、留学後にインドネシア青年会議 (Permusyawaratan Pemuda Indonesia: PPI) に所属していたりするなど、華人以外も含むインドネシア人とのネット

トワークを持っていた。「スカルノの学生」であった華人は、これらのネットワークを通じてインドネシアに残る家族と連絡を取り、ヨーロッパへの移住を果たし、そこで家族との結びつきを取り戻すことができたという。

「プラナカン華人」のネットワークが、同じ社会階層に所属した華人同士の結びつきが主であるのに対して、「スカルノの学生」の華人は、亡命者として同様の背景を持つインドネシア出身者との紐帯が強い。また、現在のトリサクテイ大学 (Universitas Trisakti) の前身であるレス・プブリカ大学 (Universitas Res Publik) の卒業生や関係者にも九・三〇事件を契機にヨーロッパへ移住した人々が少なくなかったため、レス・プブリカ大学関係者との交流がある人々もいる。レス・プブリカ大学は、スカルノ期の華人政治家でインドネシア国籍協議体 (Badan Permusyawaratan Kewarganegaraan Indonesia: B A P E R K I) の議長であった、シャウ・ギョク・チャン (Sjaw Giok Tjhan) によって設立された大学である。九・三〇事件以降、シャウ・ギョク・チャンは共産党との関係性が疑われて投獄され、インドネシア国籍協議体は解体した。レス・プブリカ大学も、九・三〇事件を契機にインドネシア政府によってトリサクテイ大学として改組され、現在にいたる。

「スカルノの学生」を含む亡命者は、スカルノ体制からスハルト体制への移行というインドネシア国内の体制転換

に加え、移動先においても冷戦という国際政治の構造の中で、個々人の人生が何重にも翻弄される人生を歩んだ。著者のインフォーマントの一人は、自らの政治的傾向をインドネシア・ナシヨナリストという意味で「共和国派」と称したが、共和国派として祖国への貢献を夢見て留学へ臨んだ人々が、人生の大半を国外での移動に費やしたことの意味は重い。

インドネシア国内における九・三〇事件の被害者の多くが、家族に対しても自らの経験を語るができなかったように、亡命者の人々の多くは、政治に左右されてきた経験から自らの経験を他者に語ることを好まない場合が多い (Dragolovic 2010: Hill 2010)。しかしスハルト体制崩壊後、これらの亡命者の中にも、若い世代へと自らの経験を話す人々が出てきている。たとえば、バリ出身者の場合は、オランダ・バリ人団体のバンジャール・スカ・ドウカ (Banjar Suka Duka) の活動を通して「スカルノの学生」と若い世代の交流が行われるようになってきている (Dragolovic 2010)。また、バリ出身者以外でも一部の亡命者らはオランダのインドネシア青年会議に所属している留学生らと交流を持っている。退職年齢に達した現在、重い口を開き始めた「スカルノの学生」らは、次世代のインドネシア人留学生に自らが持っていた希望を託そうとしているように思える。

## おわりに

本稿では、オランダ在住のインドネシア出身の華人のライフ・ヒストリーという、インドネシア華人史の中で記述されることが少なかつたもう一つの華人史の断片を通して、第二次世界大戦後のインドネシアにおける脱植民地化と、冷戦構造が深化していく中で起こったインドネシア国内・国際政治の状況の変化を検討してきた。

本稿でとりあげた人々がオランダに移住するまでの経緯には、インドネシアの独立、経済ナシヨナリズムの興隆、社会主義国との連携の深まり、スハルト体制成立と反共産主義国への転向、華人への弾圧など、インドネシア地域の独立およびその後のさまざまな変化が凝縮されている。こうした移住の経緯における経験の共有が、インドネシアからオランダに移住した人々にとつて、人間関係の基盤となつている。

最後に、一九九八年にスハルト政権が崩壊し、インドネシアが民主化したことが、インフォーマントの人々にどのような影響を与えたかを簡単に付したい。インドネシアとの行き来が自由になったことにより、インフォーマントの何人かは、以前より頻繁にインドネシアに帰国し、自らの

ルーツの再訪を始めている。「プラナカン華人」の中には植民地期からの家族史の収集を始める人もみられる。亡命を強いられた「スカルノの学生」や、反スハルト体制の活動家だった人々、元レス・ブブリカ大学卒業生は、民主化後に設立されたインドネシアの華人団体と連絡を取り合うほか、オランダに留学しているインドネシア人と交流を図るなどして、華人以外のインドネシア人とのつながりを築いており、より直接的な形でインドネシアとの関係を再興している。中には、インドネシアに帰国することで、冷戦期を経て半世紀以上に及んだ自らの移動の歴史に終止符を打つ人もいる。

本稿で検討してきたとおり、オランダ在住のインドネシア出身の華人にとつて、インドネシアは出身国であっても必ずしも常に精神的な拠り所としての「祖国」として位置づけられてきたわけではなかった。もしくは、「祖国」と位置づけたくとも、その思いが受け入れられていないと感じてきた人々も多い。しかし、民主化後一五年を経たインドネシアは、長い時間をかけようやく彼・彼女らの祖国となつたといえる。

### ●注

\*1 一九六〇年代前半には、約一〇万人の華人が中国へ「帰国」した。これは、村落部における外国籍住民の商業活動を

制限した一九五九年大統領令一〇号の施行を背景としていた。同令の施行に際し、中国国籍者や国籍が定でなかった華人の間で混乱がおこり、中国への帰国を選択した人たちがいた。この時のインドネシアから中国への華人の移動は、同時期に赤十字によって行われた日本から北朝鮮への帰国事業とならび、第二次世界大戦後のアジアにおける二大国際移動であるといえる（モリス・スズキ二〇一）。ただし、中国には、一九五〇年代および一九六〇年代に留学生として渡航した人も多い。帰国者、留学生ともに、七〇年代以降香港へ再移動した人々も多数いる。香港に移動した元留学生に関しては、Coppel (1990) が詳しい。

\*2 プラナカン華人団体には、イニシアティブ協会 (Vereniging Inisiatip)、デン・ハーグ、一九八二年設立)、友人親睦会 (De Vriendenkring Lian Yi Hui、アムステルフェーン、一九八五年設立)、フレンドシップ (De Vriendschap、アムステルフェーン、一九八九年設立)、華裔協商会 (Hua Yi Xie Shang Hui、ユトレヒト、一九八七年設立) などがある。

\*3 オランダにおける中国系移民の概要は Pickle (1998) を参照。

\*4 Beekhuis en Oosten (2001) を参考にとすると、一九五七年一月八日にインドネシアを出発したシバヤック号 (乗船港、下船港、到着日不明) の可能性が高いが、Bさんの記憶違いがあれば、一月二二日スラバヤ発、翌年一月二〇日ロツテルダム着のシバヤック号が該当すると考えられる。

\*5 キュラソーは、インドネシア同様オランダの旧植民地であったが、一九五四年よりオランダ領アンティルの一部と

なった。二〇一〇年に独立する。

\*6 九・三〇事件の被害者のオーラル・ヒストリーをもとに編纂されたローサ編 (二〇〇九) が参考になる。

#### ●参考文献

アバデュライ、アルジュン (二〇〇四) 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』門田健一訳、平凡社。  
グロウライ、アルジュン (二〇一〇) 『グローバリゼーションと暴力——マイノリティーの恐怖』藤倉達郎訳、世界思想社。  
石井由香・関根政美・塩原良和 (二〇〇九) 『アジア系専門職移民の現在——変容するマルチカルチュラル・オーストラリア』慶應義塾大学出版会。

カースルズ・S、M・J・ミラー (二〇一) 『国際移民の時代』関根政美・関根薫監訳、名古屋大学出版会。

河野健一 (二〇〇八) 『イスラム系移民増に揺れるオランダ——伝統のリベラリズムと多文化主義は守れるか』長崎県

立大学国際情報学部研究紀要』九号、七九—九〇頁。

西芳実 (二〇一〇) 『インドネシアのアチェ紛争とディアスポラ』駒井洋監修、首藤もと子編 『東南・南アジアのディアスポラ』叢書グローバル・ディアスポラ二、明石書店、六八—八八頁。

宮本謙介 (二〇〇三) 『概説インドネシア経済史』有斐閣。

モリス・スズキ、テッサ (二〇一一) 『北朝鮮へのエクソダス——「帰国事業」の影をたどる』田代泰子訳、朝日新聞出版。

吉田信 (二〇〇四) 『包摂と排除の政治力学——オランダにおける市民権／国籍の過去・現在・未来』『地域研究』六巻二

- 号、八一〇〇頁。
- ローサ・シモン、アム・ラティ、ヒルベルト・ノアリド編 (二〇〇九) 『インドネシア——九・三〇事件と民衆の記憶』 亀山 恵理子訳、藤田ゆかり監修、明石書店。
- Anderson, Benedict R. O'G (1972) *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance 1944-1946*. Ithaca: Cornell University Press.
- Ang, Ien (2001) *On Not Speaking Chinese: Living Between Asia and the West*. London and New York: Routledge.
- Beekhuis, Henk, Herman van Oosten (2001) Reparëring uit Nederlands-Indië. *I. Boletijst*. [Oroningen: Beekhuis].
- Blusse, Leonard (1998) The Ethnic Chinese Communities in the Netherlands. Wang Ling Chi and Wang Gangwu (eds.), *The Chinese Diaspora: Selected Essays* vol. 2. Singapore: Times Academic Press, pp. 149-152.
- Dragojlovic, Ana (2010) "Sukarno's Students": Reconfiguring Notions of Exile, Community and Remembering. *Review of Indonesian and Malaysian Affairs* 44 (1): 53-81.
- Godley, Michael R. and Charles A. Coppel (1990) The Pied Piper and the Prodigal Children: A Report on the Indonesian-Chinese Students Who Went to Mao's China. *Archipel* 39: 179-198.
- Govars, Ming (2005) *Dutch Colonial Education: The Chinese Experience in Indonesia, 1900-1942*. Singapore: Chinese Heritage Center.
- Hill, David T. (2010) Indonesia's Exiled Left as the Cold War
- Thaw's. *Review of Indonesian and Malaysian Affairs* 44 (1): 21-51.
- Jansen, Tineke (1991) *Identity Politics in International Female Migration: Indonesian-Chinese Women in the Netherlands*. ISS Working Paper Series No. 122, Den Haag: ISS.
- Kraak, J. H. (1958) The Repatriation of the Dutch From Indonesia. *R.E.M.P Bulletin: Research Group For European Migration Problems* 6 (2): 27-40.
- Li, Minghuan (1998) Living Among Three Walls? The Peranakan Chinese in the Netherlands. Sinn, Elizabeth (ed.), *The Last Half Century of Chinese Overseas*. Hong Kong: Hong Kong University Press. 167-184.
- Liu Hong (2011) *China and the Shaping of Indonesia, 1949-1965*. Kyoto CSEAS Series on Asian Studies 4. Kyoto: Kyoto University Press.
- Lohanda, Mona (2002) *Growing Pains: The Chinese and the Dutch in Colonial Java, 1890-1942*. Jakarta: Yayasan Cipta Loka Caraka.
- Ministry of Social Work (1958) *Assistance to Persons Repatriated from Indonesia*. Den Haag: Ministry of Social Work.
- Ong, Aiwa (1999) *Flexible Citizenship: The Cultural Logics of Transnationality*. Durham: Duke University Press.
- Pieke, Frank N. (1999) The Netherlands. Lynn Pan (ed.), *The Encyclopedia of the Chinese Overseas*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. 322-327.
- Pramoedyana Ananta Toer (1999-2003) *Kronik Revolusi*



- Indonesia*, 14. Jakarta: Kepustakaan Populer Gramedia.  
 Rijkschrift. Boudie, Tjaij Paul The Gwan, Antoon Verhan (2010)  
*Indonesische Chinezen in Nederland*. Amsterdam: SWP.  
 Steijlen, Fridus (2010) Moluccans in the Netherlands: From  
 Exile to Migrant. *Review of Indonesian and Malaysian  
 Affairs* 44 (1): 143-162.  
 Suryadinata, Leo ed. (1997) *Political Thinking of the  
 Indonesian Chinese, 1900-1995: A Sourcebook*. Singapore:  
 Singapore University Press.

● 著者紹介 ●

- ① 氏名……北村由美(きたむら・ゆみ)。  
 ② 所属・職名……京都大学附属図書館研究開発室・准教授。  
 ③ 生年・出身地……一九七二年、大阪府。  
 ④ 専門分野・地域……インドネシア地域研究・図書館情報学。  
 ⑤ 学歴……関西大学文学部、ハワイ大学大学院・修士課程(図書館情報学)、『一橋大学大学院言語社会研究科・博士課程。  
 ⑥ 職歴……京都大学東南アジア研究センター(現東南アジア研究所)助手(二八歳、二〇〇七年に助教)、京都大学附属図書館研究開発室准教授(三九歳、任期有)。  
 ⑦ 現地滞在経験……二〇〇三年より毎年、数週間から数ヶ月をインドネシアで過ごす。オランダへは二〇一一年一月から三月、二〇一三年九月に渡航。  
 ⑧ 研究方法……二〇代の四年間をハワイで過ごし、大学生活や仕事で日系三世・四世の友人たちと多くの時間を共有した経験を、インドネシア華人の友人やインフォーマントと話す際に参照することが多い。  
 ⑨ 所属学会……東南アジア学会、日本華僑華人学会など。  
 ⑩ 研究上の画期……一九九八年五月に、ジャカルタの反華人暴動、そしてスハルト政権の崩壊をテレビで観た際の驚き。  
 ⑪ 推薦図書……ベネディクト・アンダーソン『ヤシガラ碗の外へ』(加藤剛訳、NTT出版、二〇〇九年)。